

令和8年度 北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和8年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	3～6学年は目標値を上回ったが、2学年が目標値を1.7ポイント下回る結果となった。特に2学年の「書くこと」や6学年の「理由を明確にして記述する力」に課題がある。低学年からの文作り指導や、高学年での構成を考えた文章表現の指導を継続する。
社会	5学年は目標値を15.7ポイント上回り非常に良好だが、6学年は区平均を3.4ポイント下回った。資料を読み取る力や、複数の資料を関連付けて考える「思考・判断・表現」の力、用語（八方位など）の定着に一部課題が見られる。
算数	3～5学年は目標値を上回ったが、2学年と6学年が目標値を下回った。2学年の「時計・形」、6学年の「分数の計算」など、特定の基礎技能の不足が顕著である。図や言葉を用いた具体的なイメージ化と、数学的根拠に基づいた説明力の育成に重点を置く。
理科	5学年は前年度比12.2ポイント向上し良好だが、4学年と6学年が目標値を下回った。特に顕著な課題として、顕微鏡などの実験器具の操作技能や、理科学語（結露など）の定着、実験結果から論理的に考察する力が挙げられる。
外国語	全体の正答率は目標値を上回った。リスニングによる音声理解は極めて良好である一方、アルファベット（特に小文字の j, b, l, g など）を正確に書く活動に顕著な苦手意識やつまずきが見られる。

本校の教育目標
◎よく考える子 ◎体をきたえる子 ○思いやりのある子 ○最後までやりぬく子

本校が児童に育成したい力
・「北区基礎・基本の定着度調査」等の結果を基に個に応じた指導を充実させ、「読み・書き・計算」の習熟と各教科の基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指す。 また、習熟度別指導、学力フォローアップ教室での補充等、組織的な指導体制や指導方法を工夫して更なる学力の向上を図る。 ・発達段階に応じた思考力・判断力・表現力や学びに向かう力を養うとともに、基礎的・基本的な知識・技能を活用した発表や話し合い活動等の言語活動を充実させ、問題を解決する能力の育成を図る。 ・教科等の見方・考え方を働かせた主体的・対話的で深い学びの実現のため、教科等横断的な指導を進めていく。また、授業観察による指導・助言や校内研究・研修の充実を通して授業改善を図る。
校内における学力向上推進体制
学力向上に関する特別委員会（研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会）、分掌（授業改善推進プラン、学校図書館、放課後補充教室（学力フォローアップ教室）等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

学力向上にかかわる経営方針
「学校は勉強をするところ 集団生活（社会性）を学ぶところ」 ・子どもが達成感と満足感を感じ、挑戦しようとする意欲をもつ学校づくりを推進 「確かな学力の定着」 ・少人数習熟度別指導、個に応じた指導・補充学習・家庭学習・校内研究

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・学習活動「振り返り」の充実と継続 ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 ・WEBQ－U調査を活用した学級経営	・授業時間確保のための学校行事の継続的な見直し ・放課後補充教室（フォローアップ教室）の充実 ・きたコンを活用した学習タイムの推進（個別最適化した学習） ・日本語学級の充実と担任との連携 ・算数科少人数習熟度別指導（3～6年）による確かな学力の定着	・北区教育委員会および東京都小学校体育研究会の研究協力校として、体育科の健康課題をテーマとした授業改善と、自ら学び続ける力を仲間とともに身に付けていく授業の研究の推進 ・授業観察を通じた具体的な指導・助言の実施及び、組織的な授業改善 ・サブファミリー内での指導方法の共有 幼小中学校間の交流指導を通じた連携研修及び、義務教育9年間を見通した系統的な授業改善の推進	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善（きたコンを利用したデジタルポートフォリオの活用） ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化	・保育園等との交流 ・ホームページの充実と更新 ・学校ボランティア、PTAとの連携 ・学校便りの発行（月1回） ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 （2年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	全体の平均正答率（70.7%）は目標値（72.4%）と、区平均（79.1%）を下回っている。特に「情報の扱いに関する事項」（校内47.1%、区61.8%）といった領域や、「書くこと」（校内58.2%、区73.4%）といった領域に課題が見られる。	相手の話を注意深く聞き、その内容を踏まえて応答する対話の型を、日常的なペアワーク等で意図的に取り入れる。また、「情報の扱い方に関する事項」の対策として、文章や絵の中から必要な情報を見つけ出し、目的に応じて整理する学習活動を充実させる。「書くこと」の課題に対しては、主語と述語を意識した正しい文作りを基礎から指導し、短い日記や授業の毎時間の振り返りなど、継続的に「文章を書く」機会を増やすことで定着を図る。	朝学習の時間を活用して、一文から二文の短い文章を正確に書く練習を反復し、「書くこと」の基礎力を確実に養う。また、生活科など他教科の学習とも関連させ、見聞きして集めた情報を整理し、文章にまとめたり発表したりする機会を年間を通して意図的に設定する。日常的な関わりの中で、友達の話聞いて質問や感想を伝え合う経験を積み重ね、相手を意識して表現する力を育てていく。
算数	全体の平均正答率は、区の目標値76.8%に対して、73.5%と約3ポイント下回る結果となった。問題の内容別に見ると、かたちに関する学習において、区の目標値を10.4ポイント下回り、とけいに関する学習においては区の目標値を7.5ポイント下回る結果となった。この2つの学習においてつまずきが見られる。問題文を読み、何を聞かれているのか読み取る力を伸ばすとともに、具体的なイメージを持たせながら指導を行っていく必要がある。	文章問題を正しく読み取ることができるよう、絵や図を用いて問題文を提示する。また、具体物をつかった操作活動を多く取り入れたり、図や絵を活用したりすることで具体的にイメージできるよう指導していく他、日常生活で時刻や時間を意識させる場面を増やし学習に活用できるようにしていく。	習熟の時価や補充学習の時間では文章題を多く扱い、文章題に触れる機会を増やしていく。年間を通して学習内容を復習し、確実に定着できるよう、適宜プリントやドリル、オンライン教材などを使った振り返りの時間を確保していく。また、つまずきの見られる児童には学力パワーアップ講師と情報共有しながら個別支援を行っていく。